

緒言

落合俊典

敦煌から数多くの文献資料が発見されたのは百十五年前の一九〇〇年六月であったという。敦煌文献の研究は、しかしながら遅々として進まなかった。英国・仏国・露国・邦国等世界各地に拡散した敦煌文献の全容が見えてきたのは二十一世紀に入ってからである。僅か数センチの断簡も一点として数えるると六万二千点になるという（方廣鎬）。敦煌藏経洞を覗くと日本の茶室の空間に等しいほどであるが、天井まで積み上げてでも収納される巻数は限られる。そうしてみると断簡の数が多いことは中途で分けられてしまったものも多々あったと容易に想像がつく。なかでも敦煌文献の八割以上を占める仏教文献は、東アジア仏教研究に多大な貢献を果たすこととなった。

日本古写経（一切経）との関係で言えば、地理的に遠く離れているにも関わらず親近性が強いことに特徴がある。これは長安洛陽を包含する中原の仏教テキストが同心円状に展開した結果、東方に奈良写経が、西方に敦煌仏教文献が伝存したと考えるのが妥当である。

敦煌文献は世界中で丹念に根気よく整理、研究されてきた。その研究成果は膨大と言って過言でない。それに比較して奈良平安写経などの日本古写経の文献学的研究はあまりにも寥々として少ない。何故であろうか。

理由の一つとして敦煌文献が欧米にもたらされたことが大きい。整理し目録を作成し、やがて本格的な研究が始まる。その成果に負けじと中国の研究者が昼夜を問わず調べ論稿を積み重ねる。彼らの眼中に日本古写経の存在は入っていないなかった。

二つには日本古写経に資料的価値がほとんど無いと考えたからであろう。何らかの機会で閲覧できた場合でも誤写に目を奪われ、僅かな瑕疵を針小棒大に評価へと結びつけた。

三つには、日本古写経は奈良写経や平安鎌倉写経を含めて数万巻に達するが、長らく公開される機会に恵まれなかったことが大きい。研究者が見たいと考えてもその実現は容易でなかった。

日本古写経研究所は平成二十二年（二〇一〇）六月に設立されたが、それまでは研究プロジェクトとして日本古写経の調

査・撮影が営々として続けられていた。その学問的端緒となったのは、平成二年四月九日から始まる七寺古逸經典の研究である。その成果の一部が『七寺古逸經典研究叢書』全六巻として刊行された。完結したのは平成十二年三月であったが、引き続き金剛寺一切經の本格的な研究が開始された。平成十二年から平成十八年までの計七カ年を要し、さらに深化し拡大する研究対象に追いつくために平成十七年から平成二十一年まで学術フロンティア研究事業が立ち上った。また継続して戦略的プロジェクトの研究事業を平成二十二年から平成二十六年まで推進し、ようやく日本古写經のデータベース第一陣が産声をあげたのである。この間、丸善は聖語藏の經巻をカラー撮影し、CD版にして上梓始めた。さわめて貴重な奈良写經の七百五十巻が見られるようになった。

このような研究基盤の構築によって国内外の研究者もようやく日本古写經に対する見方を変え始め、少しずつではあるが、研究論文に反映されることが増えてきた。古写經データベースは、一寺院の一切經だけでなく、数か所の一切經が集成されて始めて威力を発揮する性質のものである。一巻一巻積み重ねて五千巻、一万巻、二万巻となるとほぼ唐代長安仏教の基本テキストの概要が把握できるようになると考えられる。

さて、一切經（大藏經）の基本的概念は智昇の『開元録』の入藏録を基準としているが、実は時代により分類も収録經典も変化があり、その変遷は実に興味深い事象である。『開元録』の入藏録にある賢聖集は『梁高僧伝』や『一切經音義』等を含み、謂わば中国仏教典籍の様相を呈している。それらを検討していくと基本的仏教典籍の定義は拡大していくのである。ちなみに唐代における注釈書や仏教撰述書（章疏集伝録）の総数はどれくらいであったろうか。それは「顕密真言梵漢総数一万二千三百巻」（『一切經論律章疏集伝録并私記』巻上）であったと想定される。これが刊本大藏經の時代へ入る前までに東アジア仏教世界が生成した仏教典籍の総数と思われる。現存するものは七千巻にも達しないであろう。失われた仏教典籍には未知の膨大な知の集積が入っていたのである。

日本古写經研究所の本紀要は基本的に歴代の一切經に収録された經論律賢聖集とその他の章疏集伝録を対象とした研究が主であるが、一つの古写經・仏教典籍を解明するために周辺の研究が要請される場合には歴史・文学・語学等が動員されることは当然のことであろう。その研究対象は想像以上に広範囲であるが、本紀要がそれらを解決する確実な一指標となることを祈念してやまない。